

## 共にあること、共に進むこと

### —プラトン『饗宴』と『プロタゴラス』

金山弥平

#### 1. 中部哲学会泊りがけ大会

『中部哲学会年報』50号発刊にあたって、さまざまなことが思い出される。本学会と私の関わりは、名古屋大学に赴任した1992年に始まる。それ以来、11年間幹事（2003年まで）、14年間委員（2017年まで）、その間2年間（2015年から2017年）委員長、四半世紀にわたって中部哲学会の事務に関わってきたことになる。『年報』との関わりでは、査読の有無が全国的にうるさく言われ始めたころ、事務局幹事として『中部哲学会紀要』を『中部哲学会年報』に変更すべく奔走した。すなわち、編集委員会を設置し、論文審査を行なうことにしたのであるが、また同時に、幹事の負担軽減を目指して、二年に一回程度、庶務か会計のいずれかの幹事が交替する制度とした。これにより、ある程度負担は減ったものの、しかしなお自身学会運営の事務作業に追われる日々であったところから、2003年10月、総務担当委員、会計発送担当委員、編集担当委員を設け、学会運営を3名の委員が分担して行なう体制に手直した。私自身は総務担当委員となり、負担は非常に軽減された。

事務局の仕事は大変ではあるが、しかし楽しい面もあった。とくに泊りがけの大会である。私が会員になって間もなく、1995年10月7日、8日、三重県菰野町の湯の山温泉三重県勤労者福祉センター「希望荘」で泊りがけ大会があった（開催校三重大学）。参加者は約60名、どのような部屋割であったのか、覚えていない。

しかしその後の泊りがけ大会については手許に記録がある。まず、1999年の高岡市雨晴温泉「雨晴ハイツ」大会（開催校富山大学、10月2日、3日）。大会参加者

約60名。宿泊者40名。内訳は、307室(10帖) 蔵田伸雄、斉藤了文、田村均、308室(10帖) 本多英太郎、山田弘明、金山弥平、310室(8帖) 木村てる子、311室(8帖) 岡村信孝、永井龍男、312室(12.5帖) 大野波矢登、久保田進一、佐藤明德、三谷竜彦、吉満昭宏、313室(8帖) 浜渦辰二、黒積俊夫、315室(12帖) 渋谷克美、藤本温、蒔苗暢夫、316室(12帖) 柴田正良、平田一郎、別所良美、吉田健太郎、317室(12帖) 谷口佳津宏、服部裕幸、宮内璋、318室(12帖) 加藤恒男、武井勇四郎、吉田千秋、320室(12帖) 菊地恵善、土屋純一、中村直行、321室(12帖) 浅野幸治、伊集院利明、青山広、秋元ひろと、322室(12帖) 柏端達也、戸田山和久、武笠行雄、横山輝雄である。懇親会のみのお出席者は、宮島光志、田中末男、北野孝、稲垣恵一の4名。富山大学からは非会員の松崎一平君も事務の手伝いに駆けつけてくれた。「大会のお知らせ」には次のように記されている。

今年度の中部哲学会大会および総会は、来る10月2日(土) - 3日(日)、高岡市近郊の「雨晴(あまはらし)ハイツ」(富山県高岡市太田88-1 TEL (0766)44-6050 FAX (0766) 44-0599 — 農協の共済、温泉で海に面していて眺望絶佳)(開催校富山大学)にて開催されます。(なお今回は、懇親会料理、朝食料込みの宿泊費1万円を、大会パンフレットとともに送付する振込み用紙で、期日までに料金を雨晴ハイツに振込いただいた方にかぎり、宿泊および懇親会への参加可能ということにいたしますので、ご了承ください。)

雨晴ハイツは、これに先立つこと13年前、1986年1月16日、17日に、趙治勲棋聖が、第10期棋聖戦七番勝負で小林光一人に4勝2敗で敗れたその第1局目の会場である。この10日前に趙治勲は車にはねられ全治3カ月のけがを負っていた。折れた右足脛骨が皮膚を突き破り、左膝靭帯は断裂、左手首が折れ、頭にも外傷があった。ただ脳には異常なかったところから、彼は「頭と右手にけががなかったということは、囲碁を打てという天の思し召しだ」と言って、小林名人の挑戦を正面から受けた。これに対して小林も「透徹した勝負欲で」戦いに臨む。趙治勲は入院

用患者のパジャマの上に羽織、左手足にギブス、膝に毛布をかけて車椅子で対局、小林がまず勝を取めた第1局の会場が雨晴ハイツであった。その後第2局、第3局は趙治勲が連勝。第4局は小林の勝利。第5局からは畳の上での対局となり、趙治勲はあぐらをかいて勝負したが、結果は連敗、小林名人が次期棋聖となった。小林は勝負を振り返り、「趙治勲さんは車椅子に座っていたが、いつもよりもっと強かった。それは対等に戦いたいという彼の申し出でもあった」と言い、また趙治勲は、「確かにあの時の私は強かった。私が勝てるはずだと思っていた。しかし私は負け、それは私の限界だった。けがのせいで負けたとはこれっぽっちも思っていない」と語った<sup>1)</sup>。

雨晴ハイツはまた、1991年12月17日には、森下卓六段と谷川浩司竜王の第4期竜王戦七番勝負第6局(谷川竜王勝利)、「磯はなび」への名称変更の後、2003年2月26、27日には、山下敬吾七段と王立誠棋聖の第27期棋聖戦七番勝負第5局(これによって山下七段が4勝1敗で棋聖奪取)、2007年2月22日、23日には、山下棋聖と小林覚九段の第31期棋聖戦七番勝負第4局(これによって山下棋聖が4勝0敗で棋聖死守)の会場ともなった。

泊りがけ大会用宿泊所の素晴らしさは、信州大学を開催校とする2001年10月6日、7日の大会会場となった公立学校共済組合、松本市浅間温泉「みやま荘」も同様であった。参加者は44名、懇親会のみ出席者は12名(音喜多信博、倉持武、横山輝雄、田中末男、伊集院利明、伊集院令子、立松弘孝、赤松宏、渋谷克美、赤松常弘、篠原成彦、竹田純郎)、宿泊者は26名。同施設のデラックスツイン、10帖和室、すべて素晴らしかったが、角部屋の和洋室もなかなか良かった。大会参加者には、2階11室の内の8室が提供されたが、この角部屋は一つしかなかったため、誰の部屋とすべきかあれこれ考えたすえに、愛知大学の戸塚七郎先生のところで当時学んでおられた留学生の林美茂さん——大会では「哲学者は何を観たか—プラトン哲学におけるテオーリアーの一側面についての考察—」のタイトルで発表——を含めた古代ギリシア哲学の4人組に割り当てることにした。具体的な部屋割は次のとおりである。201室(和洋室) 瀬口昌久、松井貴英、林美茂、金山弥平、202室

(デラックスツイン) 岸本晴雄、津田雅夫、203 室 (デラックスツイン) 浜渦辰二、別所良美、山田弘明、205 室 (デラックスツイン) 山本祐歌、水野美穂、206 室 (10 帖) 宮内璋、小池英光、金子善彦、207 室 (10 帖) 伊勢田哲治、戸田山和久、柴田正良、服部裕幸、210 室 (10 帖) 三宅浩、三谷竜彦、杉原桂太、中村直行、211 室 (10 帖) 吉田健太郎、久保田進一、佐藤明徳、棚橋哲治。

しかし泊りがけ大会は、部屋数の確保と出席者の把握、会費の徴収等で気苦労が大きい。そのため 2005 年大会 (開催校静岡大学) 以降、開催校の希望に乗る形で泊りがけ大会を行なわなくなった。しかし、いつか再開されれば素晴らしいのだが、という思いは今なお強い。

林さんとはその後音信が途絶えていたが、本年 2018 年 7 月、再会を果たした。哲学院教授としてご勤務の中国人民大学で開催された国際研究集会、Comparing Virtues, Roles, Duties in early China and Graeco-Roman antiquity (7 月 5 日-8 日) での私の発表予定を知られた林さんが、私に連絡して下さり、7 月 2 日、3 日の両日、それぞれ中国人民大学と北京大学で講演する機会を設けるなど、非常に歓待してくださったのである。林さんは、みやま荘の和洋室の和室部分で共に語り合ったその夜のことをよく覚え、その記憶を非常に大切にしてくださっていたのである。

## 2. 共にあること

泊りがけ大会は、夕食の後も誰かの部屋で飲みあったり語り合ったりするなど、プラトン『饗宴』のアガトン邸での集まりを思わせるような楽しい集いであった。ところで「饗宴」を意味するギリシア語は symposion であるが、しかしこの語はプラトンの他の対話篇には現れるものの、『饗宴』では用いられていない。ただ同族の語で「飲み仲間」を意味する名詞 sympotēs (213b7, 212e4, 216d7) と、「一緒に酒を飲むこと」を意味する動詞 sympiesthai (213a2) が、酔っ払ったアルキビアデスによって用いられているのみである。「饗宴」を表わす語として用いられているのは、むしろ synousia (名詞) と syneinai (動詞) である<sup>2)</sup>。だがこれらの語は文字通りには「共にあること」を意味する。

プラトンにとって「共にあること」とはどのような意味をもっていたのか。恋を主題とする『饗宴』において、解釈者たちはしばしばこの語を「性的交わり」の意味で解している。とくに 192c4-7, 206c5-6 で用いられている *synousia* (名詞) と *syneinai* (動詞) について、Liddell, Scott & Jones, *A Greek-English Lexicon* も含めて多数の解釈者がこれを「性的交わり」の意味で解する。しかし、彼らがその解釈の根拠に用いるまさにその箇所で (192c4-7)、アリストパネスは、傲慢のゆえに神によって二分割され現在の姿になった人間について、各人が自分の片割れと共にある (*syneinai*) ことを熱心に求めるのは、*tōn aphrodisiōn synousia* (性的快樂の *synousia*) のためではないと述べている (192c)。この発言は、「性的交わり」という意味を担わせるためには、*tōn aphrodisiōn* (性的快樂の) を付加する必要があったこと、また、この付加的限定なしの *synousia* および *syneinai* は、単純に「共にある」を意味するということを明らかに示すのである<sup>(3)</sup>。

人間が「共にある」ことを求めるのはなぜか。『饗宴』206c においてプラトンは、ディオティマに次のように語らせる。

人間はすべて身体と魂両面で身籠っており、ある年齢に達したとき、われわれの本性は産むことを欲する。しかし、われわれの本性にとって産むことが可能になるのは、醜いものなかではなく、美しいものなかにおいてである。というのは、男と女が「共にある」ことは、身籠ったものの出産の過程であり、そしてその営みは神的なもの—すなわち身籠りと出産は、死すべき生き物に内在する不死なる要素—であって、両者は非調和的なもの内では起こりえず、そして醜いものはいかなる神的なものに対しても非調和的であるのに対して、美しいものは調和的なものだからである。それゆえ、カロネ (美の女神) が誕生にとってモイラ (運命の女神) であり、エイレイテュイア (出産を守る女神) なのである。

205d-e では、ディオティマは次のように述べていた。

恋をしている人とは、自分自身の半分を求める人であるといったことが語られているが、しかし私の議論の主張によれば、半分にせよ全体にせよ、それがまた善きものであるという事態が伴わなければ、半分を求めることも、全体を求めることもない。なぜなら、人々は、自分の足や手が悪しきものであると自分に思われるなら、それらを切り捨てようとするからである。

これはもちろん、アリストパネス弁論中の 191d-193a への言及であり、彼の立場への批判もそこには含まれている。そのためアリストパネスは、ソクラテスの話の後でただちに口を差し挟もうとするが (212c)、アルキビアデスの乱入によってそれは妨げられる。だがアリストパネスの話のすべてが、ディオティマによって否定されているわけではない。そもそもアリストパネスの話には曖昧なところがある。つまり彼が意味するのは、(1) 男と女、女と女、男と男が惹かれあうとき、各個人が、男性あるいは女性の特定の個人を求め、その特定の出会いに喜びを感じるということなのか (cf. 192b-e)、それとも、(2) 個体差は抜きにして、元来男同士の結合体であったものは男を求め、女同士の結合体であったものは女を求め、異性同士の結合体であったものは異性を求めるということなのか (cf. 191d-192e)、不明なのである。しかしいずれにせよ、よく考えてみると、われわれが求めるのは善き相手であることが判明する。まず(2)の場合は、例えばわれわれが異性に惹かれるとき、異性なら誰でもよいというわけではない。自分にとって害にしかならないと思われる個人をわれわれが恋の対象とすることは、通常はない。また(1)の場合も、何らかの事情で相手が自分にとって害悪でしかないとと思われるようになったときには、通常われわれの恋はさめ、真に赤い糸で結ばれているのはその人ではないとして、真の片割れを求めることになるであろう。

また恋の力は異性間だけでなく男同士、女同士のあいだでも働くとする点も、アリストパネスとディオティマの共通点である。アリストパネスが見抜いたように、われわれが恋する相手と一緒にいたいと思うのは、性的快楽のためではないし

(192c-d)、また生物学的な繁殖のためでもない。われわれは異性・同性にかかわらず、生きているときも死んでからも、好きな人と一緒にいたいと思う (192d-e)。なぜそうなのか。その理由を、アリストパネスは同じ身体として生きていた時代の原初的記憶に求めるのに対して、ディオティマは、美しいもののなかで身籠っているものを出産したい、またそれを通して永遠性を確保したいという原初的欲求に求める。われわれは、身体においてだけではなく魂においても身籠っている。だから、生物学的な子どもの誕生とは無関係に、同性同士の恋が存在するのである。

恋は一般的に善きもの (美しいもの) が永遠に自分のものになることの欲求であるが、またとくに、自分の内に身籠っているものを出産し、それを通して自らの不死を確立するという仕方ではなされる (206a-207a)。恋の対象が人ではなく、善きものであること、またそれが自分のものになることであるところから、プラトンの恋は自己中心的なものであると主張されることがある<sup>(4)</sup>。例えば Vlastos は、'Plato is scarcely aware of kindness, tenderness, compassion, concern for the freedom, respect for the integrity of the beloved, as essential ingredients of the highest type of interpersonal love と述べる<sup>(5)</sup>。確かにプラトンは、恋する者が相手に抱く優しさや、その人の自由への関心や、恋する相手の全人性への敬意に取り立てて言及することはしない。しかし言及しないからといって、恋の最高の形態としての優しさや人格の尊重について無自覚であったということにはならない。プラトンが描くソクラテスとアルキビアデスの関係 (『饗宴』217b-219d) を見るとき、それは明らかである。アルキビアデスは、自分はあなたを助け手として最善の者となろうと考え、喜んであなたに全てを捧げたいと思っているのですから、あなたの方でも、あなたと私にとって何が最善のことなのか、よく熟慮してください (2181d, 219a) と言って、ソクラテスを誘うけれども、ソクラテスはそれに対して次のように言うのである。「よく言ってくれた。これからわれわれは、あらゆることについてよく熟慮し、二人にとって最善と思われることをなすことにしよう」 (219a-b)。アルキビアデスはその言葉を聞き嬉しくなって、ソクラテスの寝椅子に潜り込んで両腕を彼に絡ませるのであるが、ところがソクラテスは、彼の父や兄が彼に対して示す態度以上のものは

示さなかったのである (219c-d)。ここには、アルキビアデスの人格の無視もなければ、自分のことを考えての打算もない。アルキビアデスにとって最も善いことが自分にとっても最も善いことであるという理解のもとに、「二人にとって最も善いこと」(nōin…ariston, 209b1-2) を熟慮しているのである。

プラトンは確かに高い次元の恋を構成する本質的要素としての kindness, compassion 等々には言及していない。しかしそれは、高い次元の恋だけでなく低い次元の恋をもカバーする恋の本質を彼が示そうとしているからにすぎない。恋の本質は、恋の相手との共同作業を通して、身籠っているものを出産し、そしてそれを通して不死を得ることにある。プラトンの出発点は、自然界の内に一般的に観察される雄と雌同士の生殖の欲求、また産んだ子どもを、わが身を犠牲にしても守り育てようとする欲求である (207a-d)。もちろん、自然界には生まれた子どもを一方のみが育てる動物もいるし、また人間の場合にも、一方の親が独占するケースもあれば、一方の親(ひどい場合は両方の親)が子どもを捨てるケースもある。しかし、通常の場合、人間は二人の親が協力し、また家族全体、コミュニティ全体の協力も得て子どもを育てていく。そしてそれによって、子どもは集団の各メンバーにとって「自分の」子どもとなり、メンバー同士の絆はますます強固なものとなる。プラトンは『国家』(457d) で子どもの共有を唱えるが、それは他者の苦楽をわが物とし、互いに対して kindness, tenderness, compassion, concern for the freedom, respect for the integrity of the beloved を抱く国家こそが最も優れた国家であるという理想のもとに主張されているのである (461e-462e)。

しかしこれはあくまでも理想である。だがこの理想は、すべてのものを共有しようとする恋の本質と、それによって最上の状態に保たれる集団の本質に基づく理想である。エロースが男親ポロスと女親ペニアの両性格を受け継いでいるように、身体的子どもはもちろん、精神的子どもである思想的作品も、一方の親にのみ属す子どもではない。もちろん精神的な子どもの場合、親の名前として残っているのは、ホメロス、ヘシオドス、リュクルゴス、ソロンなど、いずれか一方の親の名前のみ

である (209d-e)。しかし、これら著名人への言及の直前でディオティマは次のように語っている。

人が節制や正義を若いときからその魂において身籠っている場合は、…ある年齢に達したとき、今や分娩出産しようと欲し、私が思うに、彼もまた歩き回り (periōn, 209b3)、そのなかで出産しうる美しきものを求める。…彼は身籠っているから、醜い身体よりも美しい身体に対してより大きな喜びを感じ、もしも美しく高貴で性質のよい魂に出会うなら、心身の結合体に喜びを感じ、ただちに、徳について、また善き人はどのような人でなければならず、何を追求すべきかについて、相手のために、諸々の言論を豊かに備えるようになり (euporei, b8)、そしてその人を教育しようと試みる。すなわち、私が思うに、彼は美しい人に触れ、その人とつきあい、かねてから身籠っていたものを分娩出産し、そして傍らにいても離れていても思い出し、彼と共にそれらを一緒になって共に育て (synektrephēi koinēi, c4)、その結果、そうした人たちは互いに対して、子どもたちの共有よりもずっと大きな共有 (koinōnian, c5) を確立し、彼らの友愛をより確実なものとするのである。なぜなら彼らは、より美しく、より不死なる子どもたちを共有している (kekoinōnēkotes, c7) からである。(209a-c)

「共に育てる」、また「共有」という表現は、たとえ最初是一方が語り出した言論であっても、二人の対話を通してそれが「共有」されるものとなることを示唆する。もちろんたいいの場合、一方の名前のみを冠して精神的作品は伝えられるのであるが、それは多くの社会において、子どもの姓が父親のそれか、母親のそれに固定されてしまうようなものである。自分の内に身籠っているものを出産し、それを通して自らの不死を確立しようとするプラトンの恋は、自己中心的なものではないのである。

しかし、美そのものの観得によって不死に至ることを目標とする、美の階梯の最奥の秘儀 (210a-212a) についてはどうであろうか。この過程を進む者を指すため

にディオティマが用いているのは単数形であり、もう一人の人への言及はない<sup>6)</sup>。このことは、最奥の秘儀、とくに普遍的な美のアイデアを求める恋は、個別の相手とは無関係なものであることを示唆するのではなからうか。しかしわれわれはここで、教導こうとする者と(210a6-7)、導かれていく者(210e3)の両方が(211b7-c1)、上昇の主体として記述されていることに注意しなければならない。実際、上昇の過程のそこかしこに道標的にちりばめられている「美しい言論の出産」への言及

(210a7-8, c1-3, d4-6)は、言論を語ってみせる主体とその相手がいなければ意味のないことであろうし、また諸々の営みの後で、恋人を諸々の知識へと導いていく必要性への言及(210c7)も、恋の奥義に加わる者が二人であって、一人ではないことを示唆するのである。

しかし、それならなぜ単数形の上昇しか語られていないのであろうか。この考察のためにソクラテスと彼の弟子たちの場合を考えてみよう。ソクラテスが弟子や恋人と交わす対話は、美の階梯の上昇過程である。しかし、ソクラテスの相手が、ソクラテスが導いていこうとする高みまで到達しうるのであろうか。ソクラテスとアルキビアデスの関係においては、ソクラテスの促しにもかかわらずアルキビアデスは下の段階に留まり続けた(215e-216c)。しかしそれをもって、ソクラテスの恋が利己的であったとすることはできない。共に道を進んでいくとしても、導く者と導かれる者のいずれかが一緒についていけない場合は確かにあるのである。その一つの場合は、ソクラテスとアルキビアデスの恋の関係である。しかしまた別様の場合もある。例えば、ソクラテスとプラトンの関係である。前者の場合は、自らの傲慢のゆえにアルキビアデスはソクラテスについて行けなかった。後者の場合は事情が異なる。

ディオティマは「傍らにいても離れていても思い出して」(209c3-4)という形で、恋する相手が傍らにいない場合の共同探求に言及している。今は傍らにいらなくてもこの世での再会の希望があれば、それはそれでよい。しかし、恋する相手がハデスの国に行ってしまったという場合もある。ソクラテスの刑死は、「傍らにいても」という事態をプラトンから奪ってしまった。しかし彼は、ソクラテスを思い出すこ

とができる。プラトンは、一人で遂行される思考 (dianoia) を説明して、対話 (dialogos) が理性的思考 (nous) のやり取り (dia) として魂の内に内面化されたものであると言う (『テアイテス』189e-190a, 『ソピステス』263e, 264a-b)。ソクラテスとその言動を想い出し、彼がかつて語った言葉や行なった行為をもとにして魂の内で遂行していく思考は、プラトンにとってはソクラテスと共に進めていく対話であった。その際、プラトンにとって、ソクラテスは常に彼の傍らで探求の道を導いてくれる人であった。だが美の階梯においては、ソクラテスはどこにいたであろうか。十中八九、プラトンの隣ではなく、彼が仰ぎ見る美の階梯の高みにいたのである。プラトンはそこにいるソクラテスを目指し、記憶を通して彼と対話し、それによって彼自身上昇し、そしてその過程で自身の子どもを産む、すなわち、対話篇を執筆していくのである。作品がプラトンの名のもとに残っているのは、ソクラテスがもはやこの世にいなかったからにすぎない。少なくともソクラテスが主導的対話者の役割を果たしている著作は、プラトンの意識としては、ソクラテスと共に産み育てた共通の子どもであっただろう。

### 3. 共に進むこと

探求における二人での進行と、美の階梯における一人での進行について考えるとき、アガトン邸での *synousia* (共にあること) に向けて、アリストデモスとソクラテスが出発する際に二人が交わす対話 (174c-d) は興味深い。招待を受けていないのに饗宴に列席することをためらうアリストデモスに対して、ソクラテスは、ホメロス『イリアス』10.224 を利用し、「二人して共に道を先に進みながら」何と言うか考えることにしよう、と言う。『イリアス』では、トロイア軍に対する斥候をネストルが募ったとき、名乗りを上げたディオメデスが、もう一人仲間が欲しいと言って、「二人して共に進むときには、一方が他方より先に気づく」(*syn te dy' erchomenō kai te pro ho tou enoēsen*) と言う。『饗宴』のソクラテスは、「一方が他方より先に」(*pro ho tou*) を、「道を先に」(*pro hodou*) に言い換えて引用しているのである。

『イリアス』では (10.272-294)、ディオメデスは同伴者としてオデュッセウス

を選ぶ。二人が出発するに際して、女神アテナは、二人の右手、道の傍らに一羽のアオサギを飛ばすが、彼らはこの吉兆を喜び、アテナに祈って出発し、そして気楽に一人で出かけてきたトロイア方の斥候のドロンを捕まえ、情報を聞き出して大成果を上げるのである。他方、己惚れに満ちたドロンは、重要情報を漏らした後、殺害される。

『イリアス』の同じ言葉を、プラトンはもう一か所、『プロタゴラス』(348c-d)でも活用している。そこではソクラテスが、一問一答形式の議論を嫌がるプロタゴラスに対して、彼が対話による探求にこだわる理由を述べて、次のように言う。

どうかプロタゴラス、私があなたと対話を続けたい理由が、自分自身ではその都度行き詰っていることを一緒に考察したいということ以外にあるとは思わないでください。私は、ホメロスの言っていることはまったくそのとおりでと思うのです。すなわち、「二人して共に進むときには、一方が他方より先に気づく」。というのも、われわれ人間はすべてそれにより、行為と言論と思考のすべてについて、より豊かな者となる (euporōteroi, 348d2) からです。「他方、もしも一人で気づく場合は」、ただちに歩き回って (periōn, d5)、それを示し一緒に確立する人を求め、そのような人に出会うまでは探し求めていくのです。

ここではソクラテスは、『イリアス』の先の引用の次行「どのようにすれば益が得られるかを。他方、一人ならたとえ気がついて」(225) —この後に「思考はより緩慢で、策略は浅いものとなる」(226) が続く —の後半もあわせて引用するとともに、その文脈を変更し、一人で何か思いついた場合には、それを示し確立する人を求めて探す主張している。

ここには、11-12か月の乳幼児にして早くも認められる人間に特有の行動、pointing に相当するものが語られている。乳幼児は相手が意図をもつもの、情報を共有しうるものであるとして pointing を行なうのであるが<sup>37)</sup>、その基本的動機については、何かを取ってもらいたいのか (imperative)、関心あるいは情報を共有した

いのか (declarative)、それとも (or それに加えて) 情報を得たいのか (interrogative)、等々、いろいろ議論がなされている<sup>(8)</sup>。しかしとにかく、乳幼児が何らかの内なる動機に導かれて、外界に存在する無数の事物のなかから特定の何かを選択して指差し、相手の関心を引いていることは確かである。『イリアス』でもオデュッセウスがディオメデスより先に、そしてもちろんドロロンが彼らに気づくより先に、敵の斥候に気づいたのは、彼が行く手に危険なものが潜んでいないかどうか、あるいは、目指す情報に通じる手がかりがないかどうか、探ろうとし、五感を研ぎ澄ましていたからであった。この内的な動機に相当するものが何なのか、プラトンの探求の文脈に移すなら、それは、内に孕んでいるものを産みたいという欲求になるであろう。人は内にあるものを分娩出産しようと欲して相手を求めて歩き回り (periōn, 『饗宴』 209b3)、それによって諸々の言論を豊かに備えるようになる (euporei, b8)。そのように、共に進む二人の内の一方が他方より先に気づくことにより、人は行為と言論と思考のすべてについてより豊かな者となり (euporōteroi, 『プロタゴラス』 348d2)、他方、一人で気づく場合は、一緒に確立してくれる人を求めて歩き回る (periōn, d5) ののである。

しかしソクラテス (当時 36/7 歳) にとって残念なことに、彼が共に考察する相手として選んだプロタゴラス (およそ 57/8 歳) は、相手を負かす手段としてしか対話を見ていなかった。ソクラテスがプロタゴラスを評して、一問一答を手短に行なうことができる人であると語ったとき、プロタゴラスはそれを否定せず、ソクラテスとの対話に臨んでいく (329b)。ところが、やがて自分の答えのあいだの矛盾を指摘されると、対話の継続を嫌がり (333b)、追い詰められると苛立って身構え (333e)、機会を捉えて彼の相対主義に基づく弁論を披露し、喝采を得ようとするのである (334a-c)。そしてなおも一問一答を続けようとするソクラテスに対しては次のように言う (335a)。

ソクラテスよ、私はこれまで多くの人たちとの議論の競技に臨んできたが、もしも君が命じるとおりに私が動き、反論者が私に対話を続けるよう命じたとおりに

対話を行なったとすれば、誰との関係でも私が優れた者に見えることはまったくなくなり、プロタゴラスの名がギリシア人のあいだに広まることはなくなったであろう。

この言葉を受けてソクラテスは、そういうことであれば、所用もあることであるし、残念ながらプロタゴラスの長い話は聞けない、と言って立ち去ろうとする。しかしカリアス（17/8歳）はソクラテスを引き止め、プロタゴラスにも言い分があると主張する。それに対して、今度はアルキビアデス（18/9歳）が、ソクラテスの方に理がある発言、するとクリティアス（27歳以上）が、自分たちはどちらか一方の味方になってはならないと言い、次にプロディオコス（30代半ば）が、聞き手としての「共通の態度」(koinoi)と「同等的態度」(isoi)の違い、「討議」(amphibêtein)と「争論」(erizein)の違い、「名声」(eudokimein)と「賞賛」(epaineisthai)の違い、「喜び」(euphrainesthai)と「快」(hêdesthai)の違いについて説明し始め、そして最後にヒッピアス（およそ40歳）が、法・習慣の上では仲間同士ではないとしても、自然本来的には仲間同士である者として、選ばれた監督者の監視のもとに議論を続けるべきであると論じ始める。そこでソクラテスは、むしろその場にいる全員を監督者とし、そのもとで今度は、プロタゴラスに質問してもらい、自分が答えようと提案する(335c-338e)。こうして対話は再開するのであるが、しかし結局のところプロタゴラスは、表面上は質問の形はとるものの、実際には、シモニデスの詩について向こう受けのする詩解釈を展開するだけであつたため(339d-e)、ソクラテスは、議論をいったんプロタゴラスからプロディオコスに移した上で(339e-341e)、自分でもシモニデスの詩解釈を展開してみせる(342a-347a)。『弁明』(22b-c)において、詩人は神憑りによって語り、自分では知っているつもりでいながら実際には知らない、と述べるソクラテスにとっては、シモニデスがどう考えていたかは重要でない。彼は、詩についてあれこれ言って時を過ごす人たちが、劣悪で野卑な饗宴参列者に譬え、酒の席で、無教育のゆえに自分の声と言論を通して互いに「共にある」(suneinai)ということのできない人たち、すなわち、「共

にある」ために笛吹女の笛の音を必要とする人たちと同様であるとする。他方、教育ある優れた饗宴参列者たちは、たとえ非常にたくさん酒を飲んでも、他のものに頼ることなく自分自身の声を通して、秩序正しく順番に語りかつ聞くという仕方  
で「共にある」ことを十分になしうる。そのように、今ここでもたれている「共にあること」(sunousia)もまた、そこに居る出席者たちが自認している類いの者の集まりであるなら、詩人の考えについて云々することは止め、自らを通して自らの議論のなかで互いを吟味するという仕方  
で「共にある」べきだと、ソクラテスは言うのである (347c-348a)。このソクラテスの主張にアルキピアデスが賛意を示し、恥ずかしくなったプロタゴラスは不承不承、再度、自ら答え手になってソクラテスとの問答を始める (348b-c)。先に挙げた『イリアス』の引用は、このような仕方  
で何とかプロタゴラスを対話に引き込んだ後に、ソクラテスが彼に語った言葉なのである (348c-349a)。

しかし、ソクラテスの導きに従って自分もいっしょに考察すると主張し、ソクラテスの言葉を借りて、「共に考察することにしよう」と口では言うものの (351e)、プロタゴラスにやる気がないのは明らかである。「考察する」と言いながら、大衆の思いなしが話題になった時にも、大衆は行き当たりばつたりのことを言っているだけだから彼らに考察を向ける必要はまったくないと述べ、共同探求を避けようとする (353a)。それに対してソクラテスが、約束どおり導きに従ってくれるのであれば対話は打ち切りにしたいと言うと、今度は、自分としても従っていくつもりだから、「やり始めたことを最後まで続けたまえ」と言う (353b)。かくして対話はなお続いていくのであるが、実質は、プロタゴラスを抜きにしたソクラテス自身の内なる dialogos、すなわち彼の dianoia としての対話である。彼は自分の言論の内に、大衆と、プロタゴラスおよび自分自身を登場させ、両チームのあいだの対話を展開するのである (353c-357e)。プロタゴラスはその対話にときたま口を差し挟むだけである。かくしてソクラテスは、大衆との対話を終え、つぎにプロディコスとヒッピアスを相手にプロタゴラスと自分とが質問を投げかけていく、と称して対話を再開するのであるが、必要な同意をプロディコスから、それだけでなくヒッピアスと

プロタゴラスからも得た (358b, d-e) 後では、自らはプロディオコスとヒッピアスの陣営に加わり、プロタゴラスに「われわれに対して」(hēmin) 弁明してもらおうと言うのである (358a-359a)。しかし弁明しようにも、プロタゴラスにはやる気もないし、その手立てもない。自らの発言間の矛盾を指摘されるなかでプロタゴラスは寡黙になっていき、黙りこんだ後には「うなづく」動作さえも拒み、「君が自分で片を付けたまえ」とソクラテスに命令的に語る。これは、『ゴルギアス』506c でカリクレスがソクラテスに発したのと同じ探求放棄の言葉である (360d)。彼は、「勝ちたい (philonikein) がために答え手の役を自分に押しつけるなら、君を喜ばせる発言をしてやろう」とソクラテスに言うけれども (360e)、勝ちたいという欲求で真実を蔑ろにしているのは、彼プロタゴラスの方なのである。同対話篇における彼の最後の言葉は次のとおりである (361d-e)。

この私は、君の熱意と議論の進め方を賞賛する (epainō, 361d7)。なぜなら、私は自分のことを他の点でも悪い人間だとは思わないが、とくに妬みという点では誰にもましてそこから遠い者だからである。実際、君についても、私が出会った人の内で、とくに君と同年配の者の内で、最も敬意を表わしている相手が君であるということは、大衆に向けて私が語ったことでもあるのだ。そして言うておくが、君が将来、知恵の点で名の知れた者の一人になったとしても、私が驚くことはないだろう。しかし、これらの点については後に君が望むときに、われわれは語ることにしよう。すでに今は、別の用事に向かわねばならない時なのだから。

プロタゴラスは「後に君が望むときに」と言うけれども、ソクラテスとしては、いつでもプロタゴラスとの探求を望んでいる。またプロタゴラスが用いる「賞賛する」は、プロディオコスが先に (337b)、「実際の考えに反して嘘を言うことがよくある」場合として挙げていた語であった。彼は、心にもない誉め言葉を妬むことなくふんだんにソクラテスに示す。相対主義の立場に立つ彼にとっては、真理は重要ではな

く、益も害も含めてすべては、それを受け取る主体がどう受け取るかにかかっているものであり (334a-c)、彼にとって重要なのは、ソクラテスが対話篇の最初ですで見抜いていたように、そこに居合わせたライバル、プロディオコスとヒッピアスに対して、ソクラテスとヒッポクラテスがプロタゴラスを恋している者 (erastai) としてカリ阿斯邸までわざわざやって来ていることを示して得意になることであった (317c)。ところが、自分を恋していると思っていたソクラテスが自分を行き詰まりに追い込み、しかもプロディオコスはそれを笑って楽しんでいるのである (358b)。知恵の教師として名声をはせているプロタゴラスの怒りが、内心どれほどのものであったか、想像にかたくない。

#### 4. 永遠の探求

ソクラテスが望んでいたのは、教育ある優れた饗宴参列者たちのやり方で、自分自身の声を通して、秩序正しく順番に語りかつ聞くという仕方です。「共にある」ことであった (『プロタゴラス』347d)。恋という主題についてそれを示したのが『饗宴』である。周知のように『饗宴』は複雑な枠構造をなしている。枠となるのはおそらく前400年前後に開かれた集まりである。そこでは、アポドロロスが友人たちに求められて、アガトン邸での饗宴 (前416年1月) について、自分にはすでに下稽古ができているとして語り始める。なぜなら、先日、グラウコンが彼を呼び止め、ソクラテスやアルキビアデスが参加した集まりについて話してほしいと頼み、パレロンからアテナイへの道を歩きながら、語り合ったからである。グラウコンがその集まりについて知ったのは、ポイニクスから誰かが聞いて、その誰かからグラウコンがまた聞きすることによってであった。アポドロロス自身は、ポイニクスの情報源であるアリストデモスから聞いていた。アリストデモスはその饗宴の席におり、そして彼は、いくつかの点をソクラテスに確認したのである (172a-173e)。

『饗宴』解釈の大きな問題の一つは、なぜプラトンがこのような複雑な構造のなかにアガトン邸の饗宴を置いたのか、ということである。この問題に詳しく立ち入る余裕はここではないが、一つ確実に言えることは、この複雑な構造によって、わ

れわれは現実の労苦とは無縁の、この世ならぬ世界を覗いているかのような印象を受けることである。アガトン邸での饗宴が催された前416年は、ペロポネソス戦争（前431-404）のちょうど折り返し地点に当たる頃であった。この時、アルキビアデスはおよそ35歳、脂の乗った年齢であり、同年のオリュンピア祭の四頭馬の戦車競技に金に糸目をつけず、ギリシア最高の馬と馭者を用いて7組の馬と7台の戦車で出場し、1着、2着、4着を独占したのである<sup>9)</sup>。彼は、デロス同盟全体の英雄となった。この絶頂期の一つのエピソードが、『饗宴』のアガトン邸への乱入だったのである。このようななか、さらに彼は、ギリシアの東だけでなく西をも統治する支配者の夢を抱いて、シケリア遠征を計画した。ところが、翌年の415年、アルキビアデスにとって華々しい成功に通じるはずであったシケリア出陣を前にして、ヘルメス神像破壊事件が起こり、その嫌疑がかけられた一団のなかに、アガトン邸の饗宴に参席していたアルキビアデスとエリュクシマコスの名前が挙げられたのである。しかも、犯人捜索の過程で、私邸においてのエレウシスの秘儀の真似事という冒瀆行為を行なった者がいるという情報も出現し、ここでもまたアルキビアデスと、さらには『饗宴』にエリュクシマコスの恋人として登場するパイドロスが、容疑者リストに挙げられたのである（トゥキュディデス『歴史』6.27-28、アンドキデス『第1番弁論（秘儀について）』11-18, 35）。この場合、実際に彼らが犯罪に手を染めたかどうかは問題でない。悪くすればソクラテスの場合のように死刑に処せられる不敬罪は、敵を追い落とすための格好の手段であった。

アルキビアデスは裁判に応じると主張したが、彼の敵は、この時点で裁判を行なえば、兵士を含めてアルキビアデスの支持者が多すぎると判断し、アルキビアデスと、シケリア遠征に乗り気ではなかったニキアス（当時60歳近く）と、ラマコスの3人の全権司令官のもと、シケリア遠征軍を出発させる。総費用は3,000タレント（ほぼ1年の国家予算に相当）、また第1次出征での派遣人数は33,000人（アテナイからは25,000人）、当時の市民が約60,000人であったとすれば、その半分より若干少ない数の市民がシケリアに向かったことになる。アルキビアデスの政敵は、その間、彼に対する中傷を周到に準備し、彼がシケリアに到着した後、死刑に処す

る意図をもって彼を被告として召喚した（トゥキュディデス『歴史』6.29, 53, 61）。アルキビアデスはそれに従い、南イタリアのトゥリオイまでは自分の快速船で行ったのであるが、同地で船から脱走、雲隠れしてしまう。他方、アルキビアデスを失ったシケリア遠征軍は、その支柱を失い、優柔不断なニキアス（プラトン『ラケス』の登場人物）の戦略の失敗で全滅し、1次出征、2次出征を合計したアテナイ人の総数は35,000人以上であったが、生き残ってアテナイに帰った者は一人もいない、という結果になった。すなわち、捕虜になった者も、例えばニキアスはシュラクサイ人の手で死刑に処せられ、一般の兵士たちは過酷な強制労働のもとで命を失ったのである。

他方、雲隠れしたアルキビアデスは、その後、スパルタ軍の味方になったり、またアテナイ側についたり、紆余曲折を経るのであるが、戦争の終わり近くには、前407年に、熱烈な歓迎のなかで8年ぶりに祖国アテナイの地を踏み、將軍として陸海両軍の絶対的権力を委ねられるけれども（プルタルコス『アルキビアデス伝』27-33、クセノポン『ギリシア史』1.4.11-20）、結局、アテナイ人が期待するような華々しい武勲を上げることができなかつたために失脚し、前404年アテナイ敗戦でペロポネソス戦争が終結すると、スパルタ勢力を恐れてペルシアに逃れる。そして遊女のティマンドラとプリュギアのある村で暮らしていたところを、30人独裁政権のクリティアスが画策したのであろう、刺客の一団に襲われて殺害された（プルタルコス『アルキビアデス伝』38-39）。享年47歳であった。

他方、クリティアスの残虐な政策は長くは続かず、やはり30人政権のメンバーであった彼の従兄弟にして、プラトンの母ペリクティオネの弟のカルミデス（前446前後-403）とともに、前403年、ペライエウスを主戦場とする戦いにおいて、民主派のリーダーであるトラシュブロス率いる軍勢と戦って亡くなった（クセノポン『ギリシア史』2.4.10-19、アリストテレス『アテナイ人の国制』38）。

グラウコンも、またアポロドロスの友人たちも、ソクラテスとアルキビアデスが出席していたあのアガトン邸での饗宴について知りがっていた時期は、まさしくこの、ペロポネソス戦争終結とその後の戦後処理のごたごたの時代であった。それ

はまた、民主派が政治的主導権をとったものの、寡頭派の脅威はなお根強く、同じような過ちを繰り返さないようにアテナイがこぞって、アルキビアデスやクリティアスのアテナイ民主制に対する裏切り行為の原因を究明しようとしていた頃であった。そしてそのなかで責任者としてアテナイ人の頭に浮かんだのが、ソクラテスだったのである。

グラウコンは、ソクラテスとアルキビアデスの名前のみを挙げ、他の人は饗宴列席者として一括りにして、あの時の詳細を知りたいと言っている。アポドロスの友人たちも饗宴の詳細を知りたがっているし、またポイニクスから聞いた誰かも、その時の話について関心があったからこそポイニクスに尋ね、グラウコンも関心があったからこそその人に尋ね、そしてより詳しいことを聞こうと思ってアポドロスに尋ねたのである。そして、なぜソクラテス以外の人間は惨めな人間だとみなすアポドロスが正確な情報を友人たちに伝えようとしたのか、非常にありそうな彼の意図は、ソクラテスの真意、すなわち、彼がアルキビアデスの魂の健全な成長を願っていたこと、また、アルキビアデスのアテナイ裏切りの原因は、アルキビアデスがソクラテスの善き影響を捨て去った事実にあることを説明して、ソクラテスへの誤解を解くことにあったであろう。その意味で、プラトンの『饗宴』は、もう一つの『ソクラテスの弁明』であるとみなしうるのである。

しかし、ソクラテスの死を招いた、不正がまかり通るこの世界の政治的騒乱と、そのなかで翻弄され苦しむ人間の姿とは別に、アガトン邸での饗宴は、屈託なく楽しい世界である。プラトンが『饗宴』を執筆したのは、前385年以降と推定される。ソクラテスが亡くなって約14年後である。その頃にはアガトン邸での饗宴に参加した人たちは皆、ハデスの住人になってしまっていた。Parmentierは、プラトン対話篇執筆時に存命の人を主要対話者を選ぶことは対話内容に関する問い合わせという好ましからぬ事態を招くものとして、プラトンは斥けた、と主張している<sup>(10)</sup>。アポドロスはグラウコンに、ペイライエウス近郊のパレロンからアテナイに向かう途上で饗宴のことを語る(173b)。彼らが上っていく道は、「下っていった」(katebēn)で始まる『国家』の冒頭でソクラテスがペイライエウスへ向かう道、こ

の世の世界を示唆する洞窟への下りを象徴する道であるが、しかし方向は反対であって、このことは、『饗宴』の世界が地上ではなく、天上、ハデスの世界であることを示唆する。そこに描かれている議論の明るさは、天の国の明るさなのである。

このように考えるとき、共に語り合った中部哲学会の研究仲間の内には、今はハデスの住人となった人が結構多いことに気づく。中部哲学会の住人たちは、ハデスに行った人も、また今なおこの世界で研究を続けている人も、プロタゴラスのように勝負にこだわる人ではなく、『饗宴』の主要登場人物のように、アリストテレスやオッカムやカント等々、自分が敬愛する哲学者のことを語ることに、無上の喜びを感じる人たちであった。泊りがけ大会での浴衣姿での談笑を思い浮かべるとき、二つの世界の垣根を取り去って、『饗宴』の不死の世界に通じるような広い美の海原が垣間見られるような気がするのである。

2018年11月27日

## 注

- (1) 曹薫鉉 (2016) 「戦いに対する礼儀」。また『朝日新聞』「(人生の贈りもの) わたしの半生、囲碁棋士・趙治勲、60歳」8 (2017年3月1日) も参照。
- (2) 『饗宴』 172a7, b7, c1, 173a4, b3, 176e2, e8. Cf. Hobden (2013) 200.
- (3) この点については、cf. Kanayama (2016) 251-252.
- (4) Vlastos (1973) 8-9, 20 n.56, 30-31. Also cf. Nygren (1982) 176.
- (5) Vlastos (1973) 30.
- (6) Sheffield (2012) 133.
- (7) Tomasello et al. (2007).
- (8) Southgate et al. (2007); Begus et al. (2012).
- (9) トウキュディデス『歴史』6.16では1等、2等、4等、イソクラテス『第16弁論(競技戦車の四頭馬について)』34では1等、2等、3等、またプルタルコス『アルキビアデス伝』11は両方の言い伝えを併記。この快挙の分析については、

cf. Gribble (2012).

(10)Parmentier (1913) 165-173. Cf. also Robin (1935, 1988<sup>2</sup>) 27 n.1; Notopoulos (1939) 143 n.43.

## 文献表

K. Begus & V. Southgate (2012), 'Infant pointing serves an interrogative function', *Developmental Science* 15, 611-617.

曹薰鉉 (Cho Hun-hyun) (2016) 『世界最強の囲碁棋士、曹薰鉉の考え方：考えれば必ず答えは見つかる』(戸田郁子訳) アルク。

D. Gribble (2012), 'Alcibiades at the Olympics: Performance, Politics and Civic Ideology', *Classical Quarterly* 62, 45-71.

F. Hobden (2013), *The Symposium in Ancient Greek Society and Thought*, Cambridge.

Y. Kanayama (2016), 'Recollecting, Retelling and *Meletē* in Plato's *Symposium*. A New Reading of *hē synousia tokos estin* (206C5-6)' in Mauro Tulli/Michael Erler (eds.), *Plato in Symposium, Selected Papers from the Tenth Symposium Platonicum*, Academia Verlag (International Plato Studies, vol. 35), 249-256.

J.A. Notopoulos (1939), 'The Name of Plato', *Classical Philology*, 34, 135-145.

A. Nygren (1982), *Agape and Eros*. Translated by Philip S. Watson. University of Chicago Press.

L. Parmentier (1913), 'La Chronologie des Dialogues de Platon', *Bulletin de l'Académie royale de Belgique* 5, 143-173.

L. Robin (1935, 1988<sup>2</sup>), *Platon*, Paris.

F. Sheffield (2012), 'The *Symposium* and Platonic Ethics: Plato, Vlastos, and a Misguided Debate', *Phronesis* 57, 117-141

- V. Southgate, C. van Maanen, & G. Csibra (2007), 'Infant Pointing: Communication to Cooperate or Communication to Learn?', *Child Development* 78, 735-740.
- M. Tomasello, M. Carpenter, & U. Liszkowski (2007), 'A New Look at Infant Pointing', *Child Development* 78, 705–722.
- G. Vlastos (1973), 'The Individual as an Object of Love in Plato', in G. Vlastos, *Platonic Studies*, Princeton.

